

《発行所》
一般社団法人 岡山県
医療ソーシャルワーカー協会

《事務局》
倉敷市玉島乙島4030
玉島病院内

岡山県医療ソーシャルワーカー協会 ニュース

2020・9・1 No.29

《発行責任者》
森田 千賀子

《編集者》
長瀬 紀子 神崎 晴子
有友 公 田中香緒里

ご挨拶

岡山県医療ソーシャルワーカー協会

会長 森田 千賀子



のため、2月後半以降の研修や講演会を中止しました。さらに今年度の総会は記念講演を中止し、感染に配慮した上、規模を縮小した形で開催しました。

多くの医療機関や介護施設では感染予防対策のため、入院患者・入所者の面会制限措置が取られています。もともと入院は社会生活から離れて治療に専念する場ですが、家族などの面会は患者さんの楽しみや大事な社会との接点でした。しかし面会ができな

い事態になり、患者さんは入院により完全に社会から切り離されてしまうことになりました。療養生活上の心理社会的問題に寄り添う医療ソーシャルワーカーは、それに伴う様々な訴えに耳を傾けています。また退院支援の際の調整にも、入院の受け入れやサービス利用制限、担当者との面会ができないなど様々な制約が課されています。家族や関係機関の架け橋となり社

会生活との繋がりとなる私たちの仕事がいかに必要とされていることはないと思いません。また、感染予防対策のため多くの社会活動が制限・自粛され、社会生活や経済活動に大きな影響をもたらしています。生業が成り立たなくなり深刻な困難を抱える人々が今後ますます増えてくると考えられます。また、長引いた自粛生活により家庭問題が潜在化され、虐待などの問題が危惧されています。医療機関ではこのような隠された社会問題が明らかになることが少なくありません。医療ソーシャルワーカーは生活困難に陥っている人々として繋がり社会資源の活用や連携、そして専門職としてのソーシャルワークの実践が必要とされています。

このような状況を共有し、支えあい、学びあっていくことが、協会の役割です。しかし、人が集まった研修や会合などの開催は、いわゆる「三密」の状態をもたらす可能性があります。十分な配慮が必要です。ICTを活用した会議、研修、会員への情報提供の手段などを検討していきます。感染拡大は収束する気配はありません。私たち一人一人が自分自身を守るために、冷静に行動し、セルフケアを十分に行っていく必要があります。皆で協力し知恵を出し合いながらこの難局を乗り越えていきましょう。

2020年、予想だになかった新型コロナウイルス感染症が世界的拡大し、日本においても緊急事態宣言が発出され、社会全体に大きな影響を及ぼしています。感染をされた方、闘病中の方やそのご家族には心よりお見舞い申し上げますとともに、不幸にして亡くなられた方には心よりお悔み申し上げます。また感染拡大の防止のため、私たちが働く医療機関では様々な対応が行われる中、医療従事者の皆様には心から敬意を表します。

当協会の活動も、新型コロナウイルス感染症の拡大防止

全国的に感染が拡大する中、岡山県でも感染者が多数報告されています。感染した患者さんやその家族には心無い差別行動があったと聞きま



「新型コロナウイルス感染症拡大にともなうソーシャルワーカー業務に関する現状調査」を行って

かとう内科並木通り診療所 横山 幸生

現状調査を行った背景

医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）は、人と人とのつながりを大切にして患者・家族への支援を行ってきました。しかし、新型コロナウイルス感染症への対策では、人と人の距離をとらなければいけないこと、社会参加も制

限されるなど、このつながりを弱くせざるをえない状況にあります。これはソーシャルワーカー業務に多くの困難をもたらしています。例えば、終末期でも会えない患者と家族にどんな支援ができるのか、MSWとして考えさせられたりするのでないでしょうか。今回、このソーシャルワーカー

業務への困難さを把握するため、当協会会員に対して現状調査を行いました。ここではその一部を報告いたします。

調査の結果

全会員に対して、2020年6月10日～16日までインターネット調査を行い、56名（回答率12.9%）より回答

がありました。回答率については、初めてのインターネットでの緊急調査への周知徹底の不足、調査期間の短さから低くなっていると推察します。今後このような緊急調査の回答率を高めて、今後の協会活動に活かせる調査のあり方を考える必要があります。

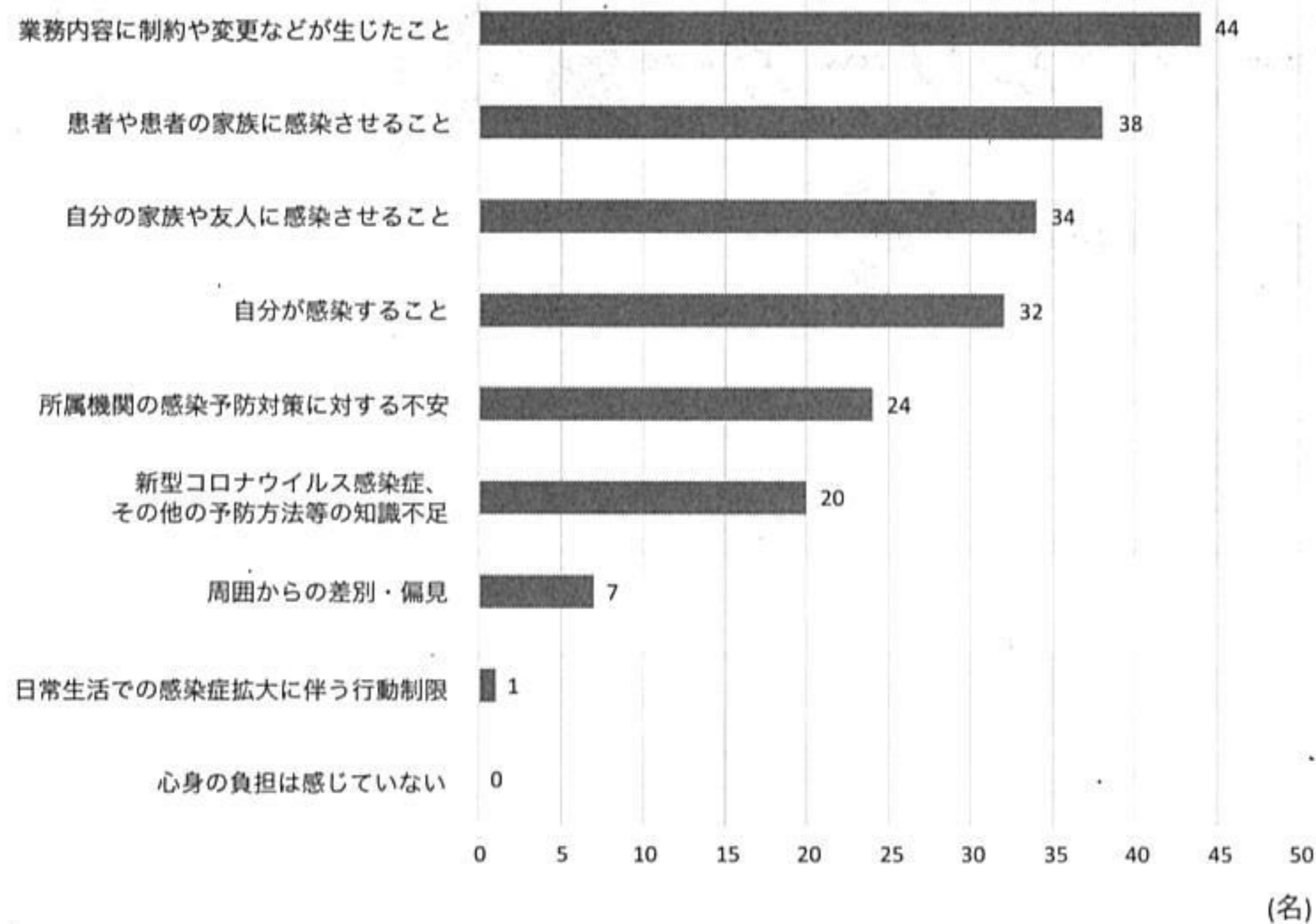
「新型コロナウイルス感染症への対応で、どのようなことでご自身の心身の負担が高まりましたか」の問いでは、まず「心身の負担を感じていない」は0名で、回答したすべての人に何らかの心身の負担がありました。心身の負担が高まった内容としては、「業務内容に制約や変更などが生じたこと」が44名と最も多く、他者に感染させること・自身自身が感染することに不安がみられました。（図1参照）

今後の課題

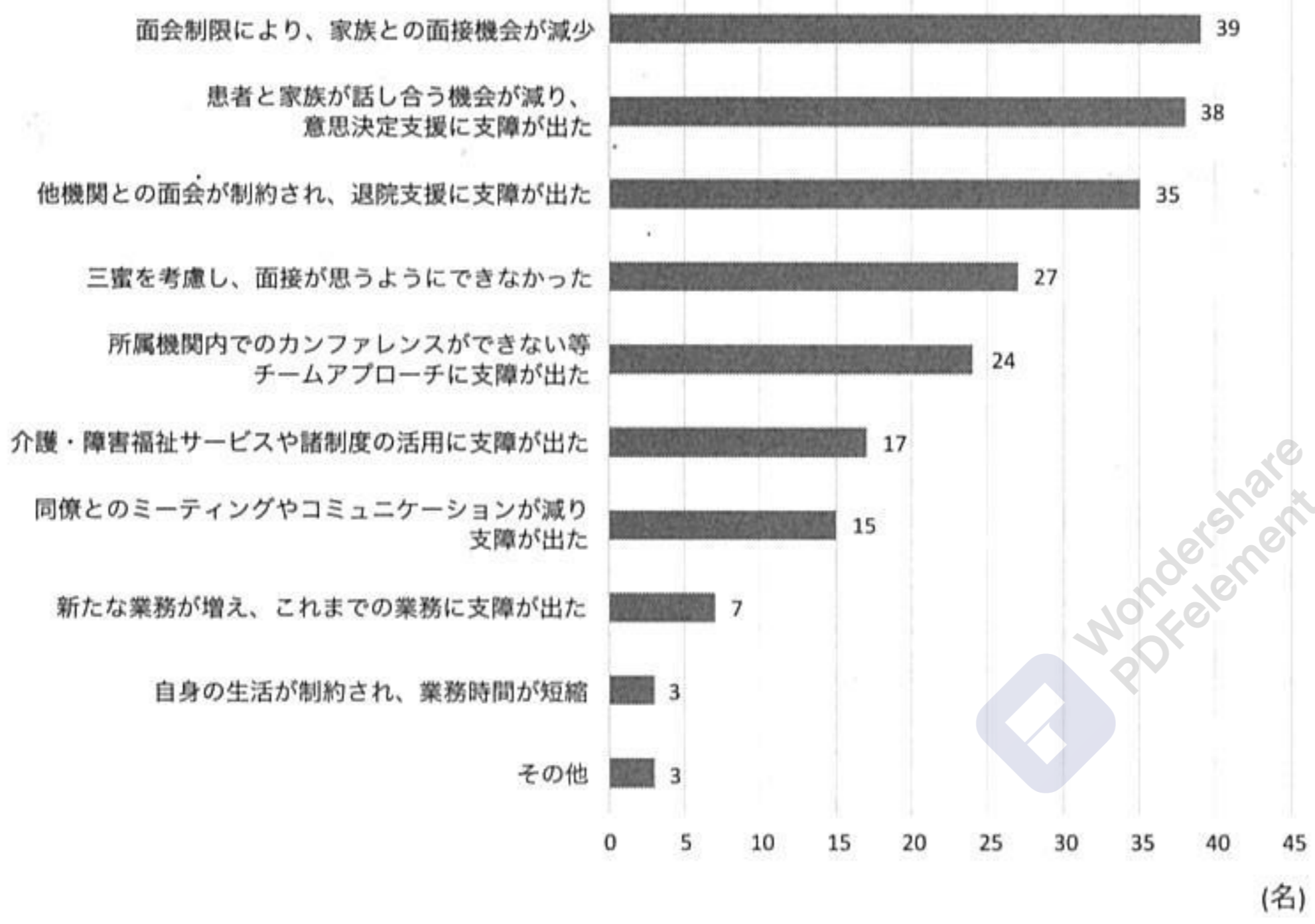
今回の調査では、感染拡大予防に努める状況の中で、普段とは異なるソーシャルワーカー業務への変更が生じ、多くの会員に心身の負担が生じていることがわかりました。その中で会員が様々な独自の工夫を行い、困難を乗り越えようとしていることも感じました。

今後の課題として、各会員からの情報発信によるそれぞれの医療機関や社会状況の共有、困難に対処する会員それぞれへの思いや創意工夫の共有などにより、会員相互でつながりを強化し支えあい、患者・家族の援助につなげていく重要性を再認識しています。

【図1】新型コロナウイルス感染症への対応でどのようなことでご自身の心身の負担が高まりましたか。



【図2】ご自身の業務でどのようなことに支障を感じましたか。



「ご自身のソーシャルワーカー業務で、どのようなことに支障を感じましたか」という問いでは、「面会制限により、家族との面会機会が減少した」と「39名」、「患者と家族が話し合う機会が減り、意思決定支援に支障が出た」が38名と多くなっています。また、「他機関との面会が制約され、退院支援に支障が出た」という回答が35名と次に多く、自由記載では、「他院、他施設での面会制限強化で情報収集が十分に執り行えず、それに伴う紹介患者の円滑な受け入れに支障が生じている」などの声

コロナ禍における影響とソーシャルワークを考える WEB研修に参加して

公益財団法人岡山旭東病院 片岡志麻

2020年5月17日、一般社団法人WITTH医療福祉実践研究所主催の全国ミーティング「ZOOMを使って全国のMSWと今を語りましょう！」にWEB参加致しました。ファシリテーターの佐原まちこ先生・八木亜紀子先生をはじめ、全国の約60名の医療ソーシャルワーカー（以下MSW）とともに、コロナ禍における影響の情報共有と今後のソーシャルワークを考える意見交換を体験させていただきました。

まず冒頭に、5地域（大分・山形・福井・千葉・愛媛）のMSWによる現状報告がありました。面会制限により家族指導や意向のすり合わせに困難性が生じていることや、終末期患者さんの面会制限によるスピリチュアルペインへの対応等、様々な影響について共有しました。一方で、ソーシャルワークニーズは変わらず存在し、WEB活用などの対応の工夫や体制整備が必要であることに加え、「環境変化の時こそMSWがニーズを発信し新しい挑戦をしていけたら」、「当事者・実践者の声こそがチャレンジの支えになる」等の前向きな声が聴けました。

第二部のグループワークでは「コロナ禍で現場に何が起こっているか」MSWとして思うこと、「リモート時代」にどのようなソーシャルワークを発展できるか」という2つのテーマで議論しました。

未曾有のコロナ禍において様々な変化を余儀なくされましたが、全国のMSWが柔軟に工夫し立ち向かっている

ことを知り、力を頂きました。印象的だった大先輩の言葉で「人と環境の間にある問題に働きかけるソーシャルワークの本質は変わらない。面接技術は方法論で、その方法論をチャレンジ精神で柔軟に考えればいい。」という内容が心に響きました。「クライエントの権利をいかに護るか」という視点が重要だったと思います。

時代とともに人々の生活が変わる中、その変化にソーシャルワークが取り残されないようにしていくとともに、クライエントのためにMSW自身の柔軟さとチャレンジ精神をもって、権利擁護の視点で組織や地域社会に発信していく行動力が大切だと再認識しました。一方で、リテラシーの保管・伴走者としてクライエントを置いていかない配慮など、IT活用の留意事項についても確認しました。

また、人とヒト・モノをつなぐ、ないものは創る、考え工夫するといった多くのMSWがその英知や力を集結させて日々実践していることがこの禍の中でも役立てるのではないかと感じました。そして、ソーシャルワークの本質や価値・理念を基盤にしつつ、新たな時代のソーシャルワークをいかに展開するかが問われている気もしていました。この度、WEB研修は初めてでしたが、「禍転じて・・・」ではありませんが、全国のMSWの方とタイムリーに対面で繋がれる便利な機能にも触れ、今後の支援や研修に活用できるヒントを得ることができ大変有意義でした。

2019年医療ソーシャルワーカー リーダーシップ研修を受講して

茶屋町在宅診療所 松岡邦彦

「医療ソーシャルワーカーリーダーシップ研修」は3日間連続で行われ、内容は日本医療社会福祉協会会長（早坂由美子先生）による「期待される医療ソーシャルワーカー像」にはじまり、昨今のソーシャルワークのトレンド、地域連携、リスクマネジメント、倫理・人権擁護、スーパービジョンなど、管理者および管理者候補向けの研修内容でした。具体的にはソーシャルワークの基礎的知識の確認ではなく、ソーシャルワーク実践におけるマネジメント、例えば、訴訟リスクへの対応、機関内における専門職育成指導、積極的に地域活動に参画する手法などの多岐にわたる内容が凝縮された研修内容でした。研修担当講師はソーシャルワーカーの記録研修で著名な八木亜紀子先生（リスクマネジメント）や、ルーテル学院大の福山和女先生（スーパービジョン）等、日本を代表する講師陣により講義が提供されました。

とは難しいでしょう。しかし、相談援助の内容や質を客観化・可視化して伝えることが難しいことから、これらのマネジメントスキルを活用し、医療現場にソーシャルワークが介在したことによる成果をわかりやすく的確に表現することの重要性を学ぶことができました。

参加者の一人がコメントとして「忙しさにかまけて、ただ漫然と目の前の相談を『こなす』ことだけでは、専門職が提供する『質の高い業務』をしていくとはいえないのではないか」といった発言が非常に印象に残りました。「医療ソーシャルワーカー業務指針」の趣旨にもあるとおり、ソーシャルワーク実践がますます専門化、高度化しています。こうした現状にあつて、ソーシャルワークの力が組織内・地域社会に必要な能力であり、ソーシャルワークは「人を幸せにする活動」（ベネフィット）となることを的確に示すことがますます重要になっていきます。医療ソーシャルワーカーがクライエントにとっても、所属する組織や地域社会にとっても、非常に有用な人材、必要不可欠な存在でありつづけることが必要でしょう。具体的には専門職としての知識とスキルを常に研鑽し、そのリソースをクライエントへの支援だけでなく、所属する組織や地域社会に自らのソーシャルワーク実践を通してベネフィットとして還元し、他の専門職では代替が困難と評価される取り組みが、広義の意味での「ソーシャルワーク実践」なのではないか、ということを学ぶとてもよい機会となりました。

この研修の特徴はソーシャルワークのみに特化した研修ではなく、課題解決手法を具体的に学ぶ演習です。活用した知識・技術として「PDCAサイクル」等のマネジメントスキルなどを学びました。これらのマネジメントスキルを活用し社会課題に挑むことは民間企業等ではよく用いられている手法です。しかし、医療機関、特に我々、医療ソーシャルワーカーが所属する相談部門では、こうした評価やマネジメント手法を採用していかないことが多いような印象をうけます。もちろん、相談援助にこれら問題解決方法をそのまま活用するこ

2020年度岡山県医療ソーシャルワーカー協会役員・運営委員

職名	氏名	所属	職名	氏名	所属
会長	森田 千賀子	水島協同病院	運営委員	榮田 勇希	藤田病院
副会長	横山 幸生	かとう内科並木通り診療所	〃	太田 将登	水島協同病院
〃	長瀬 紀子	倉敷中央病院	〃	大野 ひとみ	玉島病院
常任理事	有本 明美	玉島病院	〃	岡部 政志	玉島中央病院
〃	原田 久美子	みわ記念病院	〃	河原 直美	倉敷リハビリテーション病院
〃	若林 里佳	水島中央病院	〃	櫻井 由希	心臓病センター榊原病院
理事	有友 公	南岡山医療センター	〃	高岡 憲一	倉敷平成病院
〃	大久保 亜紀	岡山市立市民病院	〃	高橋 和志	岡山市立市民病院
〃	大田 真一	さとう記念病院	〃	高橋 直哉	岡山協立病院
〃	片岡 志麻	岡山旭東病院	〃	田中 志野	渡辺胃腸科外科病院
〃	神崎 晴子	まび記念病院	〃	中野 聖也	倉敷記念病院
〃	鈴木 智恵	川崎医科大学総合医療センター	〃	沼本 晋平	吉備高原医療リハビリテーションセンター
〃	武内 宏憲	川崎医科大学附属病院	〃	萩原 仁美	芳野病院
〃	田中 香緒里	佐藤病院	〃	林 拓樹	岡山リハビリテーション病院
〃	八谷 直博	玉島協同病院	〃	日高 千陽	岡山大学病院
〃	山川 ちづる	岡山ひだまりの里病院	〃	福田 佳奈	岡山西大寺病院
監事	石橋 京子	岡山大学病院	〃	松尾 成哲	水島中央病院
〃	田中 渉	吉備高原医療リハビリテーションセンター	〃	眞宮 昌代	光生病院
顧問	池田 恵子	老人保健施設白梅の丘	〃	溝手 知江	済生会吉備病院
運営委員	安保 裕子	梶木病院	〃	南 俊也	しげい病院
〃	石原 奈津希	金田病院	〃	森川 恭成	つばさクリニック
〃	板谷 紀子	倉敷中央病院	〃	和田 友美	岡山労災病院
〃	板野 宏美	岡山ひだまりの里病院			

2020年度 事業計画

項目	事業内容
組織の充実強化、会員の資質の向上及び広報活動	・新規会員の加入促進 ・医療ソーシャルワークの普及、啓発活動 ・研修会の開催 ・年報・協会ニュースの発行 ・研究実践奨励事業 ・グループ研修会支援事業 ・月刊ニュース「オムスワ」発行 ・ホームページの運用 ・医療ソーシャルワーカーリーダーシップ研修（国立保健医療科学院）への参加 ・ソーシャルワーカーデーの取り組み ・岡山県医療ソーシャルワーカー協会創設70周年記念行事への取り組み ・会員への情報配信の検討 ・会員調査及びデータベースの作成
関連職種団体との連携	・岡山県社会福祉協議会の会員としての出席 ・岡山県介護保険関連団体協議会への出席 ・倉敷市介護認定審査会運営委員会への出席 ・倉敷市介護認定審査会への出席 ・ハンセン病療養所の将来構想をすすめる会・岡山の会議出席 ・岡山県難病相談支援センター運営協議会出席 ・NPO法人岡山高齢者・障害者支援ネットワークへの参加 ・岡山県精神保健福祉協会への協力 ・関連団体実施事業の後援 ・日本医療社会福祉協会の事業への協力 ・全国医療ソーシャルワーカー協会会長会議への出席 ・岡山市依存・嗜癮関連問題対策審議会への出席 ・津山市社会福祉協議会 津山市地域包括ケア会議委員会への出席 ・津山市在宅医療・介護連携推進事業会議への出席 ・真庭市地域包括支援センター真庭市地域包括ケア会議への出席 ・備前市在宅医療・介護連携推進協議会への出席 ・倉敷市在宅医療・介護連携推進会議への出席 ・岡山県エイズ医療等推進協議会出席 ・岡山県在宅推進協議会への出席 ・岡山県地域包括ケアシステム学会への協力 ・岡山県地域両立支援推進会議への出席 ・岡山災害派遣福祉チーム（DWAT）推進会議への出席
会議運営	・岡山県医療ソーシャルワーカー協会総会 ・岡山県医療ソーシャルワーカー協会常任理事会 ・岡山県医療ソーシャルワーカー協会理事会 ・組織検討委員会 ・各部運営会議
社会活動	・岡山県難病医療福祉相談会への相談員の派遣 ・ハンセンボランティアゆいの会への協力 ・NPO法人岡山高齢者・障害者支援ネットワーク主催相談会へ相談員の派遣 ・大規模災害の支援活動

岡山県医療ソーシャルワーカー協会 会長表彰 受賞者 (会長表彰) かとう内科並木通り診療所 横山 幸生 氏

編集後記

オリンピックに沸きあがるはずだった2020年は、2019年末に発生し全世界に爆発的に広がったCOVID-19によって未曾有の事態にさらされ続けている。
 重症化した感染者を救う決定的な治療法はまだ確立されておらず、「感染=死」の漠然とした不安・恐怖から生じた疑心暗鬼・社会全体の閉塞感、感染を予感させる「モノ」を遠ざけようとして「風評」を生み、「差別」を生んでいる。何度も繰り返されてきた「人禍」が今もまた起きているのである。
 ただ、私達MSWはいつの時代にあっても真実を見失わず、苦

悩める人に寄り添い、その人自身の力でその人らしく生きていく為に働きかけてきた。その実践活動の指針となっているのは、「人権と社会正義の原理」を拠り所とし「尊厳ある個の尊重」遵守を謳った倫理綱領に他ならない。
 「どんなに混乱した状況下でも、専門技能である傾聴・対話でもって正しい事を正しく伝え、相手や社会の変革を促そうとする専門職であることを忘れてはならない」。そう、自分に言い聞かせ、今日も患者のもとに足を運ぶのである。(K・T)